

第3節 勉強していてうれしいとき、悩み

1. 勉強していてうれしいと感じるとき

【高校生の大多数が「うれしい」と感じるのは、第一に「難しそうな問題が自分で解けたとき」(67.3%)、第二に「テストの点数が上がったとき」(64.1%)である。進学率の低い高校の生徒ほど、テストの点数という具体的な結果が現れたときに学習上の達成感を感じる傾向が強い。】(図2-16、図2-17)

Q9

あなたは勉強していて、どんなときに「うれしい」と感じますか。
1)～7)のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

高校生は、勉強していてどんなときに「うれしい」と感じるのだろうか。高校生の学習行動における充足感、達成感の所在を明らかにするために、図2-16にあげた7項目を設定し、各々について「とてもうれしい」から「ぜんぜんうれしくない」まで4段階で回答させた。

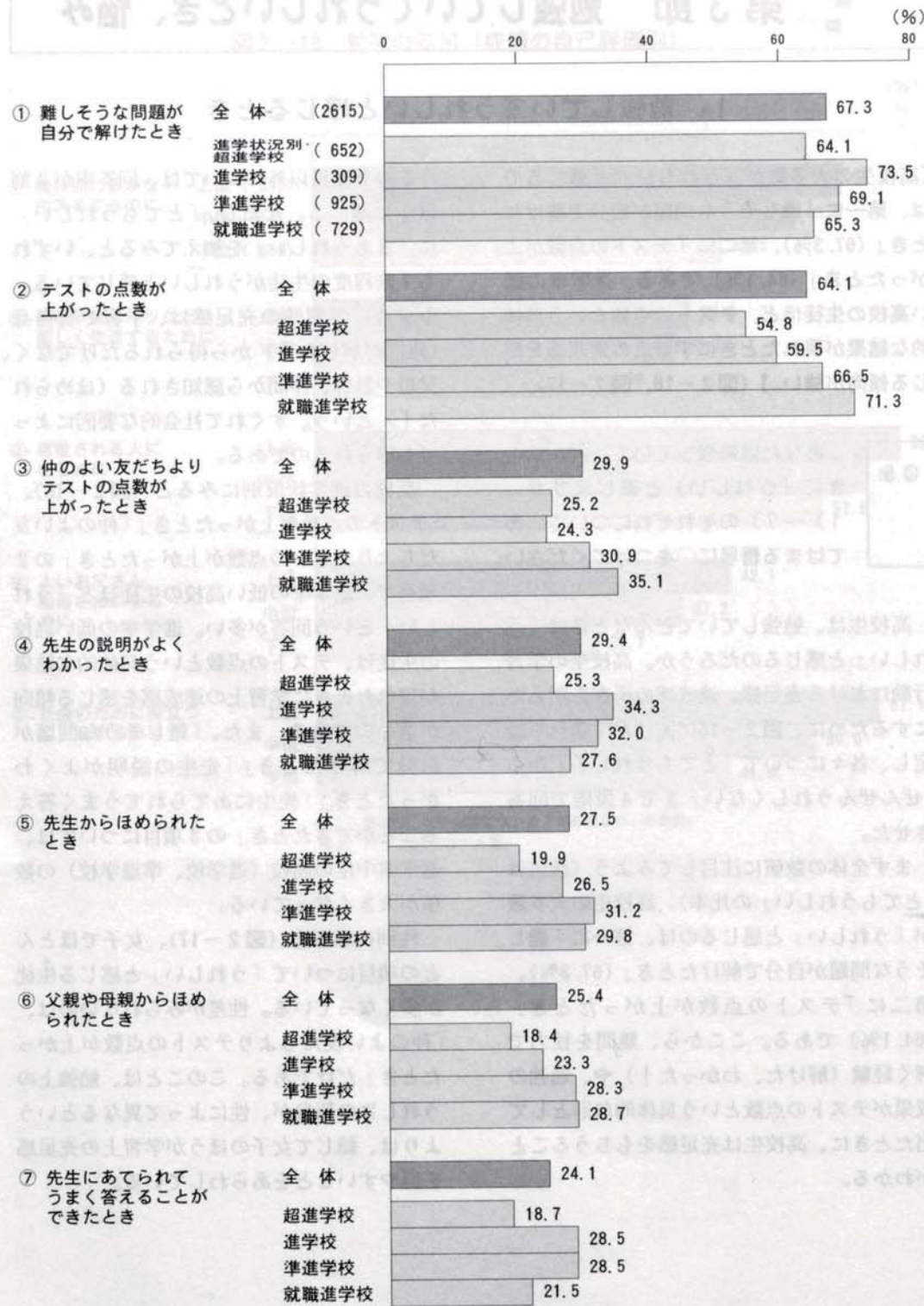
まず全体の数値に注目してみよう(数値は「とてもうれしい」の比率)。高校生の大多数が「うれしい」と感じるのは、第一に「難しそうな問題が自分で解けたとき」(67.3%)、第二に「テストの点数が上がったとき」(64.1%)である。ここから、難問を独力で解く経験(解けた、わかった!)や、勉強の成果がテストの点数という具体的な形として出たときに、高校生は充足感をもちうるということがわかる。

この2項目以外については、回答率が3割以下に落ちる。ただし、「とてもうれしい」に「まあうれしい」を加えてみると、いずれも7割程度の生徒がうれしいと感じている。つまり、学習時の充足感は、学習それ自身(難問が解けた!)から得られるだけでなく、父母や教師、仲間から認知される(ほめられた!)という、すぐれて社会的な要因によっても得られるのである。

高校の進学状況別にみると(図2-16)、「テストの点数が上がったとき」「仲のよい友だちよりテストの点数が上がったとき」の2項目で、進学率の低い高校の生徒ほど「うれしい」という回答が多い。進学率の低い高校の生徒は、テストの点数という具体的な結果が現れたときに学習上の達成感を感じる傾向が強いのである。また、「難しそうな問題が自分で解けたとき」「先生の説明がよくわかったとき」「先生にあてられてうまく答えることができたとき」の3項目については、進学率中位の高校(進学校、準進学校)の数値が大きくなっている。

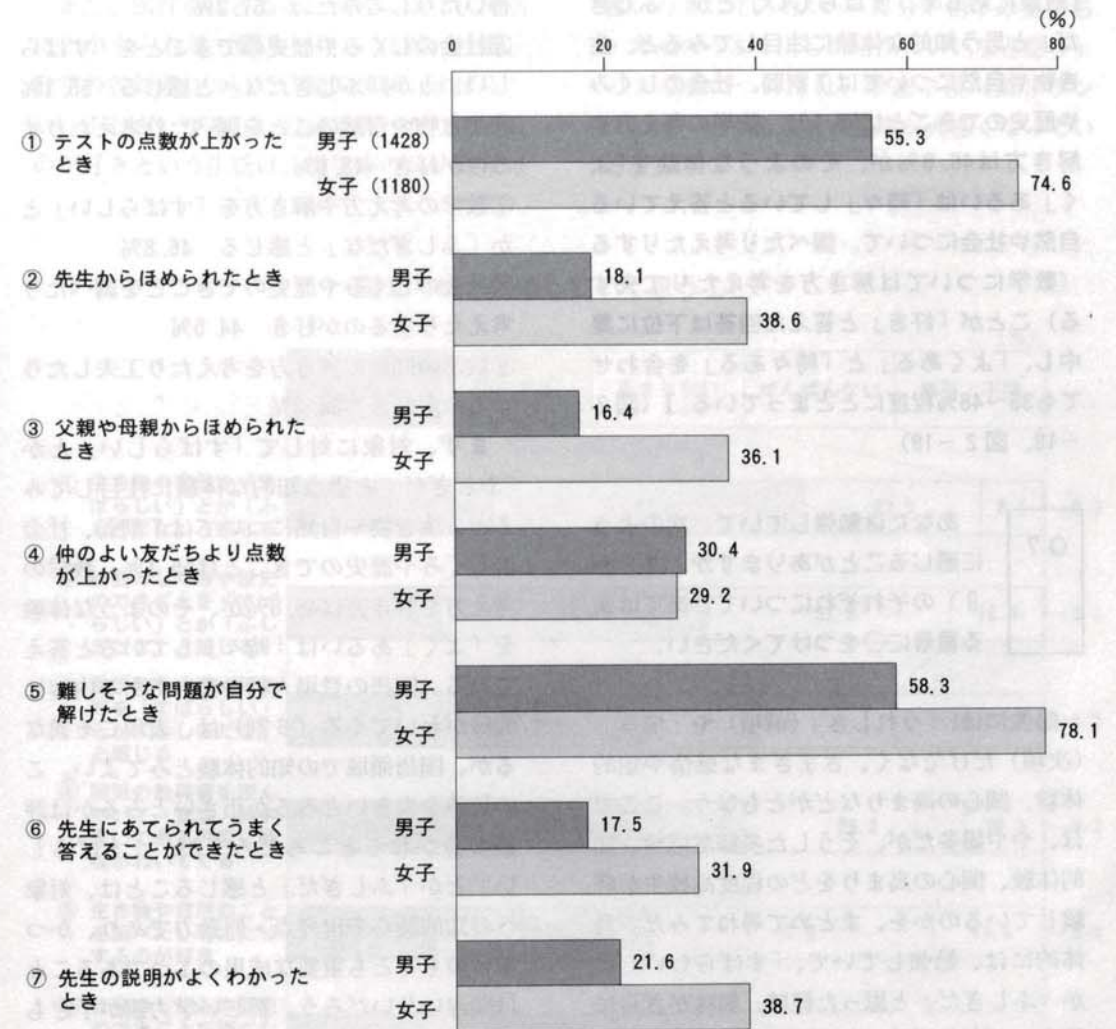
性別にみると(図2-17)、女子でほとんどの項目について「うれしい」と感じる生徒が多くなっている。性差がみられないのは、「仲のよい友だちよりテストの点数が上がったとき」だけである。このことは、勉強上のうれしさの源泉が、性によって異なるというよりは、総じて女子のほうが学習上の充足感を得やすいことをあらわしている。

図2-16 勉強していて「うれしい」と感じる時(全体、高校の進学状況別)



注1) 数値は「とてもうれしい」の割合。
注2) ()内はサンプル数。

図2-17 勉強していてうれしいと感じるとき(性別)



注1) 数値は「とてもうれしい」の割合。
注2) ()内はサンプル数。

2. 知的体験と関心

【対象に対して「素晴らしい」とか「ふしぎだ」と思う知的な体験に注目してみると、生き物や自然については7割弱、社会のしくみや歴史のできごとは55.1%、数学の考え方や解き方は46.8%が、そのような体験を「よく」あるいは「時々」していると答えている。自然や社会について、調べたり考えたりする（数学については解き方を考えたり工夫すること）が「好き」と答えた回答は下位に集中し、「よくある」と「時々ある」を合わせても35~48%程度にとどまっている。】(図2-18、図2-19)

Q7

あなたは勉強していて、次のように感じるがありますか。1)~9)のそれぞれについて、あてはまる番号に○をつけてください。

勉強には、「うれしさ」(前項)や「悩み」(次項)だけでなく、さまざまな感情や知的体験、関心の高まりなどがともなう。ここでは、やや雑多だが、そうした多様な感情、知的体験、関心の高まりをどの程度高校生が経験しているのかを、まとめて尋ねてみた。具体的には、勉強していて、「素晴らしい」とか「ふしぎだ」と思った経験、興味がさらに強まってきた経験、自分で調べたり考えたりすることへの関心などである。

図2-18は、設定した9項目について、単純集計結果を示した。「よくある」「時々ある」の合計比率が大きい順に項目を並べると次のようになる。

- ①自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う 77.9%
- ②生き物や自然を「素晴らしい」とか「ふしぎだ」と感じる 68.0%
- ③国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる 60.2%
- ④英語を使って外国の人と話したり、手紙を

書いたりしてみたい 57.2%

- ⑤社会のしくみや歴史のできごとを「素晴らしい」とか「ふしぎだ」と感じる 55.1%
- ⑥生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好き 48.0%
- ⑦数学の考え方や解き方を「素晴らしい」とか「ふしぎだ」と感じる 46.8%
- ⑧社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好き 44.5%
- ⑨数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好き 34.3%

まず、対象に対して「素晴らしい」とか「ふしぎだ」と思う知的な体験に注目してみると、生き物や自然については7割弱、社会のしくみや歴史のできごとは55.1%、数学の考え方や解き方は46.8%が、そのような体験を「よく」あるいは「時々」していると答えている。国語の登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる(6割)は、表現こそ異なるが、国語領域での知的体験とみてよい。この数値を大きいとみるか小さいとみるかは評価の分かれるところだろうが、「素晴らしい」とか「ふしぎだ」と感じることは、対象への知的関心の出発点・原動力であり、かつ学習のもっとも重要な成果の1つであることは間違いのないだろう。新しい学力観が子どもたちの知的体験にどのように影響するか、今後の推移に注目していきたい。

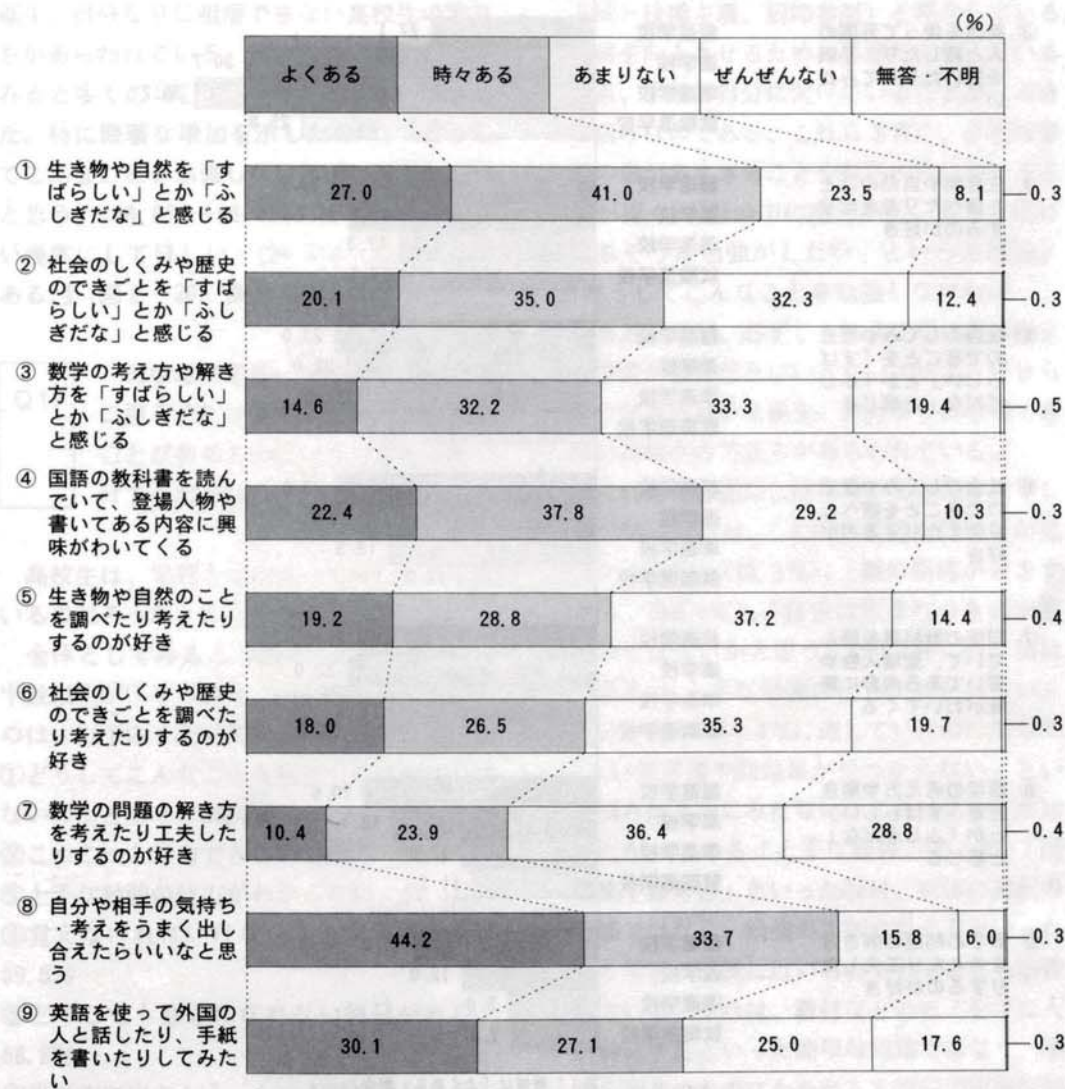
自然や社会について、調べたり考えたりする(数学については解き方を考えたり工夫すること)が「好き」と答えた回答は、下位に集中し、しかも「よくある」と「時々ある」を合わせても35~48%程度にとどまっている。具体的には、生き物や自然のこと(48.0%)、社会のしくみや歴史のできごと(44.5%)、数学の問題(34.3%)である。これらは新しい学力観のもっとも重要なねらいに含まれると考えられるが、現時点では決して高い数値となっていない。「素晴らしい」とか「ふ

しぎだ」と思った知的体験を、自ら調べたり考える学習行動へと、いかにして結びつけるかが課題となっている。

また、属性別にみると、高校の進学状況別に差がみられる(図2-19)。自然、社会、数学の各対象について、知的体験(素晴らしい、ふしぎ)があり、自分で調べたり考えるのが好きという生徒は、進学率の高い高校は

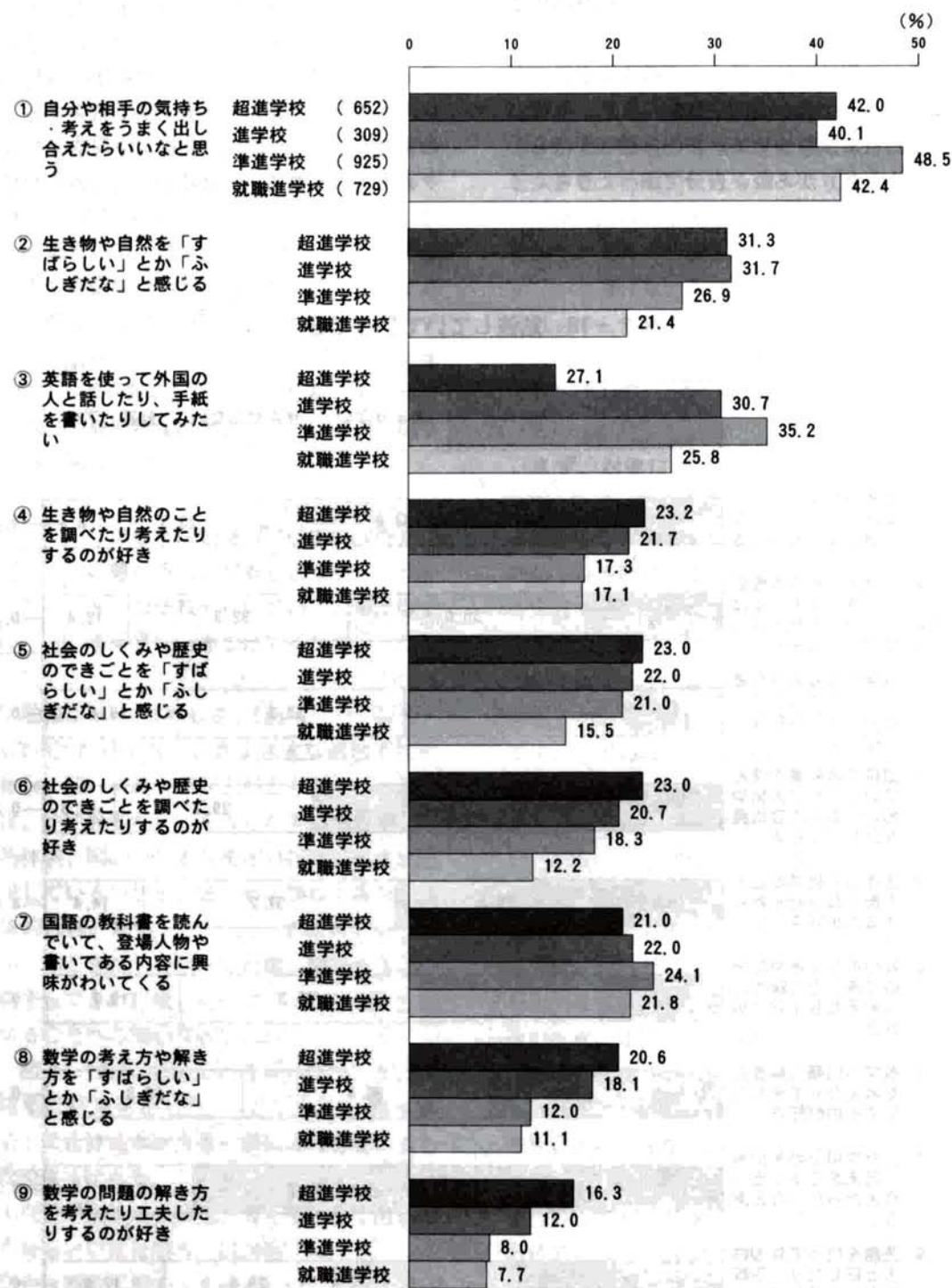
多い。「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味をわいてくる」「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」の3項目については、準進学校(第3ランク)で「よくある」の比率が大きくなっている。

図2-18 勉強していて思うこと



注) サンプル数は2615人。

図2-19 勉強していて思うこと（高校の進学状況別）



注1) 数値は「よくある」割合。
注2) () 内はサンプル数。

3. 勉強上の悩み

【「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という回答がもっとも多く、3人に2人。学習をめぐる悩みや不満は、「こつこつ努力できない」自分に対して向けられており(65.5%)、さらに「上手な勉強の仕方がわからない」(64.4%)。これら3者に、必要な学習の量が多すぎることや教科内容に対する不満が続く。課せられた学習内容の意義を、自分なりに咀嚼できない高校生の苛立ちがあらわれている。第1回調査と比較してみると多くの項目で、「そう思う」が増加した。特に顕著な増加を示したのは、「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」(56.8%→66.4%)と「わかりやすい授業にしてほしい」(34.3%→45.2%)である。】(図2-20、表2-1、表2-2)

Q11

あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。そう思うことがあるものにいくつでも○をつけてください。

高校生は、学习上どのような悩みを抱えているのだろうか。

全体としてみると(図2-20)、高校生の半数以上が「そう思うことがある」と答えたのは、以下の6項目である。

- ① どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う 66.4%
- ② こつこつと努力できないで困る 65.5%
- ③ 上手な勉強の仕方がわからない 64.4%
- ④ 覚えなければいけないことが多すぎる 59.5%
- ⑤ どうしても好きになれない科目がある 58.8%
- ⑥ 世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい 52.8%

「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という回答がもっとも多

く、3人に2人に及ぶ。学習内容や、勉強という行為そのものに対する疑義、不満が、この回答に端的にあらわれているといっただろう。学習をめぐる悩みや不満は、こつこつ努力できない自分に対して向けられており、さらに上手な勉強の仕方を手に入れたいという欲求が強い。この結果は、成績を向上させるのに大切な要因(努力主義、効率的な勉強方法-技術主義、前節参照)と符合している。成績を向上させるために必要だと考えている要素、手段が自分に欠けていることが、大きな悩みなのである。これら3者に、必要な学習の量が多すぎることや教科内容に対する不満が続く。「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」という意識は、「どうしてこんなことを勉強しなければ…」の裏返しだが、必ずしも社会生活に直接役立つ学習が重要だとはいえないにせよ、課せられた学習内容の意義を、自分なりに咀嚼できない高校生の苛立ちがあらわれている。

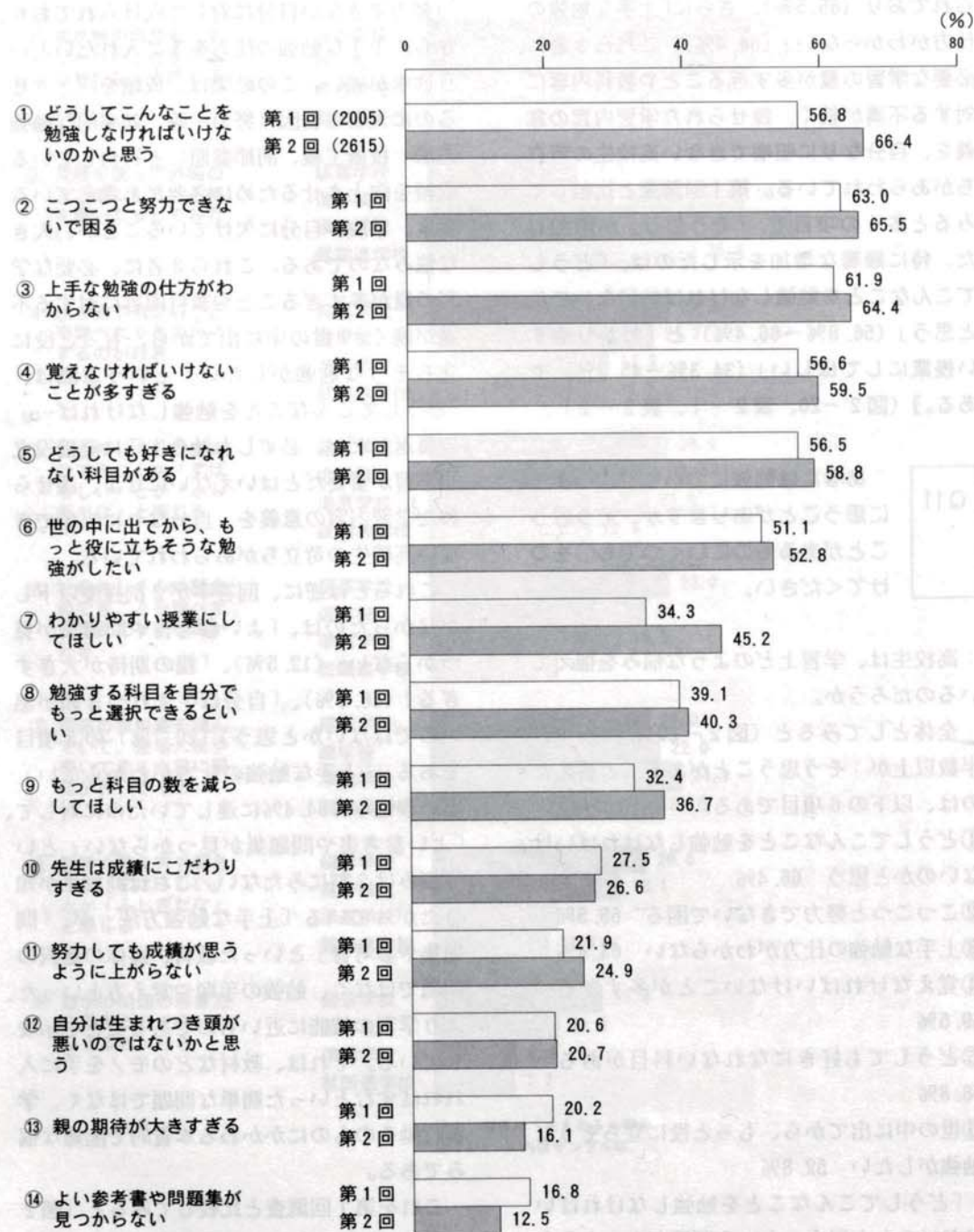
これらとは逆に、回答率が2割程度以下しかなかったのは、「よい参考書や問題集が見つからない」(12.5%)、「親の期待が大きすぎる」(16.1%)、「自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う」(20.7%)の3項目である。「上手な勉強の仕方がわからない」という悩みは64.4%に達していたのに対して、「よい参考書や問題集が見つからない」という悩みは2割に満たない。これは高校生が知りたがっている「上手な勉強方法」が、「問題集や参考書」といった教材、媒体の選択の問題ではなく、勉強の手順や覚え方といった、より学習の技能に近いものであることを示唆している。それは、教材などのモノを手に入ればすむといった簡単な問題ではなく、学習行動そのものにかかわる本質的で困難な悩みである。

これを第1回調査と比較してみると(図2-20)、3項目を除いて11項目で、「そう思

う」という回答が増加した。とくに顕著な増加を示したのは、「どうしてこんなことを勉強しなければならないのかと思う」(56.8%→66.4%)と「わかりやすい授業にしてほし

い」(34.3%→45.2%)である。第1回調査から第2回にかけて、多くの側面で高校生の学習上の悩みは増大している。

図2-20 勉強上の悩み(第1回との比較)



注) () 内はサンプル数。

属性別にみると、性差は小さく、高校の進学状況による差が大きい(表2-1)。ほとんどの項目で、進学率の低い学校で「そう思うことがある」とする生徒が多くなっている。とりわけ、「上手な勉強の仕方がわからない」

「覚えなければいけないことが多すぎる」についてその傾向が著しい。また「先生は成績にこだわりすぎる」という回答が、進学校(第2ランク)で突出して多い点が目につく。成績の自己評価別には(表2-2)、成績下位者ほど勉強上の悩みを訴えている。

表2-1 勉強上の悩み(高校の進学状況別、複数選択)

	超進学校 (652)	進学校 (309)	準進学校 (925)	就職進学校 (729)
上手な勉強の仕方がわからない	58.3	59.2	63.1	73.7
どうしてこんなことを勉強しなければならないのかと思う	60.3	68.6	64.5	66.0
どうしても好きになれない科目がある	49.8	50.8	58.2	71.1
こつこつと努力できないで困る	62.3	65.7	63.4	70.9
もっと科目の数を減らしてほしい	33.3	31.1	37.9	40.6
自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う	17.0	21.7	19.4	25.1
覚えなければいけないことが多すぎる	55.1	59.9	58.7	64.2
先生は成績にこだわりすぎる	20.6	36.9	26.8	27.3

注) () 内はサンプル数。

表2-2 勉強上の悩み(成績の自己評価別、複数選択)

	上位(399)	中位(1541)	下位(656)
上手な勉強の仕方がわからない	49.1	66.1	70.1
どうしても好きになれない科目がある	47.9	60.0	63.3
こつこつと努力できないで困る	47.9	65.9	75.3
もっと科目の数を減らしてほしい	32.6	35.2	43.3
わかりやすい授業にしてほしい	39.3	45.5	48.2
自分は生まれつき頭が悪いのではないかと思う	14.3	18.9	29.1
先生は成績にこだわりすぎる	25.3	23.2	35.2

注) () 内はサンプル数。